

授 業 研 究

都 築 亨 北 田 明 子 飯 島 幸 久
鈴 木 一 悠 小 山 由 里 子 丹 辺 千 代

I 授業研究グループの歩み

1. 授業研究を共同テーマに掲げたわれわれの狙い

1974年「授業研究グループ」は発足した。学校長として三枝先生を迎えたことが一つの刺激になったことはたしかであるが、それとともに各教科がセクト主義に陥っている附属でなんとか教科の枠をこえて研究プロジェクトができないものかと考えたことがその出発点であった。

1974年に社会科で班学習を取り入れた学習をさせ、その記録をもとにして何か共通の話題提供が出来ないかということで、中学2年の社会科「アメリカ合衆国の発展」の発表学習を授業記録に纏めた。(授業者 都築)そして、翌年にはその継続でやはり中学2年の社会科「ローマ帝国とキリスト教」(授業者 都築)を取り上げ、授業記録をとるとともに、他の教科の先生方にも参観頂き、それをまないたにのせて研究会議を行った。以後、77年には研究グループで高2倫社(川田)中1社会科(丸山)高2保健体育(北田)中1英語(宮田)の授業をまないたにのせ、また授業のビデオ録画を撮った。(高1,地理 原。中3 社会 公民 田中。中1 英語 宮田。中2 社会 歴史 丸山)紀要には「倫・社における発表形式の授業について」(田中)を発表した。

77年には「創作ダンス」の指導(北田)「生徒の多様化に対応した授業展開」(川田 伊藤)を紙上发表、この段階でわれわれが教科の枠を越えて『授業』を問題にしたのは「色々な担当教科の違いがあり、又教科の中でも、教科観、なにを期待して教科の指導を考えているかについてのその指導者の意識によって「授業」

の様子は変わってくるにしても、現在、崩壊寸前にある授業(というよりも学校教育)の中で、なおかつ日々の授業のなかでしか生徒に与えられないものが存在するだろうし、その授業の持つ意味と役割は、今日の状況のなかでより重要性をましていると考えたが故である。」(都築 授業研究の一つの視点)^{*(1)}
昭和53年にはいって研究グループの再編成が行われ、取り組むべきテーマが確認された。

- (1) 教科教育の理論と実践
- (2) 中高の一貫を考えた授業の在りかた
- (3) 授業効果をあげる形態・方法論
- (4) 学力の遅れている生徒にやる気を起こさせる授業の工夫
- (5) 視聴覚教材の利用と授業の在りかた
- (6) 中等教育の教育効果の長期測定
- (7) 評価について

そして、大きなテーマを『授業の追及と改善』とし、活動内容として、

- ① VTRによる授業記録
- ② 他校訪問

③ 教えるがわとしての授業観・教材観の交換

その路線の上に「発表学習の問題点」(丸山)は学級における小集団づくりと社会科の授業内容・方法との関係の考察を、「特設道徳におけるディペイトの導入」(宮田)は道徳授業における新しい試みである。VTRを利用した授業分析については、高3の国語の授業「島尾敏雄 春の日のかげり」(授業者 酒井)高1 地理「洪積台地と沖積平野の土地利用」(原)について検討した。「一つの試み—英語科における英詩のイメージ表現」(宮田)は多様な授業形態を考えたか

なりユニークな研究発表であった。

2. 教育実習指導の効率化とシステム化

昭和55年度より「附属学校教育方法等改善経費」の支出を得、教育実習指導に関するプロジェクトがスタートした。本校で毎年2回行われる教育実習を如何に効率的に行うことが出来るか、

- ①名古屋大学全学のオリエンテーション
- ②本校におけるオリエンテーションの中でのVTRその他による能率的な実施案の策定。
- ③実習の効率的指導「教育実習の手引」の改訂もこの一環として進められた。
- ④授業の録画どり 国語 社会科 数学 理科 英語の5教科について
- ⑤視聴覚教室の整備

プロジェクト第2年次の進展については、紀要27集に「教育実習の効率化とシステム化」(宮田)で実習生のアンケートもふまえて報告している。*⁽²⁾

3. 現在までの「授業研究グループ」の研究方向と問題点

「学力差を考慮した英語の指導」(宮田)は高校3年の英語指導についてのかなり詳細なまとめである。生徒の授業に対する構えについて昭和56年「生徒の授業への構え」(都築)として紀要にまとめたが、57年10月の本校の研究協議会では、更にそれを進展させて「アンケートー授業及び授業の周辺ー」(酒井)にまとめて発表した。また、「特別教室における能力グループ学習と席について」(鈴木)は理科の能力別グループ

を成績による座席指定により実験しようとしたものである。「授業過程と家庭学習」(伊藤)「学習過程における仲間づくり」(飯島)も授業の周辺的なことからのなかから問題点を追及しようとしたものである。

「生徒の創造性を生かした徒手体操の指導」(飯島)は前掲の「創作ダンス」(北田)と対応する論稿である。以後、われわれのグループのあしどりが多少重くなったのはその方向を見失いかけたことでもあり、またいろいろいな教科の集まりでそのなかに共通の問題点を見出し得ないことにもよる。

「授業」というのは現在の学校のなかでの最も日常的な営為である。それぬきに「学校」は成立しない。しかし、特に高校での授業が入試技術に解消される面や、個人的、特殊人格の技量にされてしまう傾向はいまもって一般的である。VTRによる授業分析だけでなく、もっと効果的、今日的な切り込みかたが必要である。

- ①黒板を使わない授業
- ②講義式でない授業
- ③小集団によるきめ細かい授業
- ④学習意欲を高める授業

などこれからも模索して行きたいと考えている。

※(1) 都築 亨 「授業研究の一つの視点ー中学社会科歴史分野における班学習の展開を例としてー」
名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第20集

※(2) 宮田 学 「教育実習の効率化とシステム化」
名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第27集